第Ⅳ部門　　たまり空間の利用実態と空間評価について

近畿大学大学院　学生員　○柳原　崇男
近畿大学理工学部　生会員　　三星　昭宏
近畿大学大学院　学生員　　岡本　英晃

1．はじめに

歩行空間の利用形態としては，本来の目的である「歩行」以外に，休憩，遊び，交流（立ち話，待ち合わせ等）情報収集，沿道･路上施設の利用等の様々なものが考えられる．そこでポケットパーク，街角公園等，道路施設または隣接して設けられるたまり施設は，このような歩行者等の様々なニーズに対応するために設けられるものでゆとりや豊かさを実感できる生活空間を想像するうえで重要な役割を担うものである．

1980年代に入り，こうしたポケットパーク等のたまり空間に関した計画が全国的に普及し，都市デザインの中にとりいれられた．しかし歴史の浅い都市デザインであるため，これらたまり空間における利用者の意識調査からの評価・考察を行った事例研究は少ないのが現状である．

そこで本研究は，これらたまり空間の現状を把握するために，利用者の利用実態と空間評価を知るヒアリング調査を行った．そしてそれらの結果を比較・検討し，それぞれの機能・役割を把握し，今後の整備のあり方や運営の方法を考察する．

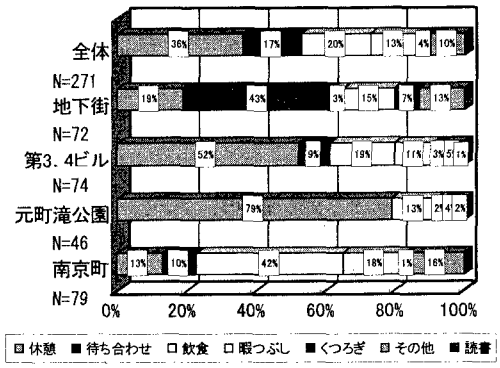
2．研究方法

今回の選定場所としては，人通りが多く，利用者数が多いと考えられる元町滝公園，南京町広場，大阪駅前第3,4ビル公開空地，なんばウォーク地下街広場の４カ所を選定した．そこで利用実態と空間評価を知るヒアリング調査を行った．

3．調査結果

利用目的を場所別にみると，地下街では「待ち合わせ」が43%と多く，「その他」はほとんどが通り抜けであった．第3,4ビル公開空地では「休憩」が52%，「飲食」が19% となっている．元町滝公園では「休憩」が79%とほとんどが休憩行動であった．これは商店街に来た買い物客が，少し休んでいくという行動をとっているものと考えられる．南京町広場では「飲食」が42%と多くなっており，中華街特有の利用目的であると考えられる．「その他」には観光やイベントという利用が多かったのもこの広場の特徴である．また「休憩」が他の広場より少なくなっているのは，人の割合に対してベンチの数が少なく，多少にぎやかであるので休憩には適していないと思われる．全体しても，主な利用目的は休憩であるが，場所により様々な利用形態があることがわかる（**図―１**）．

場所別の利用頻度としては，地下街広場では「月2,3回」，「月１回」，「週１回」が多くなっている．これは買い物等に来た人がよく利用しているものと考えられる．第3,4ビル公開空地では「ほぼ毎日」，「週2,3回」，「週１回」と頻繁な利用が目立っている．これはサラリーマンが仕事の合間に利用しているものと考えられる．南京町広場では「はじめて」が30%，「年2,3回」が29%，「年１回」が19%となっており，観光客等が多いことよりこのような利用頻度になったものと思われる．利用頻度においても，利用目的同様に場所によりかなりの違いがあることがわかる（**図―２**）．



図―１　場所別：利用目的

Takao YANAGIHARA,　Akihiro MIHOSI,　Hideaki OKAMOTO

次に各広場の空間評価について，利便性，快適性，景観性に関する共通項目（項目は場所により少し異なり，共通項目のみで行った）を変数とし，因子分析を行った．その結果を示す(**表—1**)．

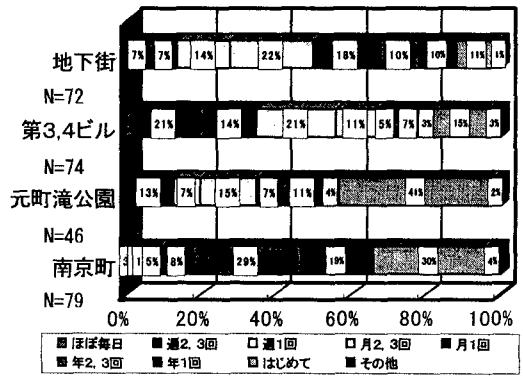
第1因子は「広さ」，「施設」といった項目の値が高く，「立地場所」の値が低いことより機能性と解釈した．

第2因子は「雰囲気」，「美観性」，「ベンチやテーブル，外壁などのデザイン」といった項目の値が高く，「広さ」の値が低いことより快適性と解釈した．

因子分析により得られた結果から広場別のプロット図を示す(**図—3**)．

まず機能軸に着目すると地下街広場が優れていることがわかる．これはトイレ等の施設が充実しており，地下にあるというのも非常に便利であると思われる．南京町広場はトイレがなく，ベンチの数も人の割合に対して少なくなっているので，これらの改善が望まれていたことよりこのような結果がわかる．第3,4ビル公開空地ではベンチは少なく座るところがあるだけなので，座るところのデザインに問題があると思われる．またトイレも広場にはない．

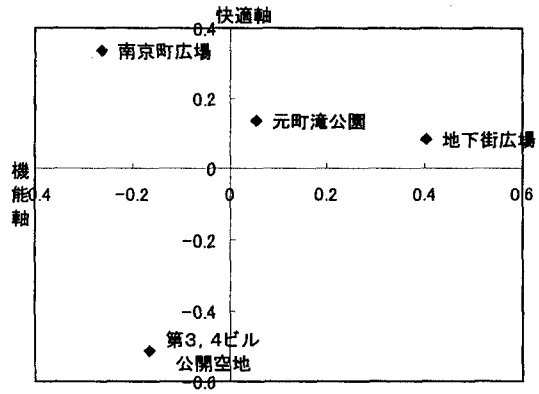
次に快適軸に着目すると南京町広場が優れていることがわかる．これは立地場所が中華街ということもあり，広場のデザインも中華風になっているため，全体的雰囲気もよくいごこちのよい空間となっているからであると思われる．元町滝公園も外壁は赤いレンガ作りで滝があり，緑も多く景観面を非常に重視したデザインとなっているため，雰囲気もよく快適な空間であるからと思われる．第3,4ビル公開空地では美観性等に問題があり，このような結果になったものと思われる．



図—2　場所別：利用頻度

表—1　回転後の因子行列

変数名	因子No.1	因子No.2
ベンチやテーブル、外壁などのデザイン	0.52578013	0.4820719
ランドマーク	0.48198793	0.20918676
音の評価	0.25335032	0.34749262
広さ	0.64721092	0.03727002
施設	0.54313893	0.16027405
まわりとの調和	0.466067	0.37297959
美観性	0.5101263	0.47224449
雰囲気	0.27774242	0.64036842
立地場所	0.00895713	0.4418368



図—3　Ⅰ軸とⅡ軸のプロット図

4．まとめ

たまり空間の利用実態としては，休憩，飲食，待ち合わせ等が多くなっているが多種多様な利用形態があり，場所によりかなりの違いがある．

空間評価については，機能性，快適性といった面から評価されており，機能性ではトイレ等の施設の充実が求められている．快適性では景観や雰囲気等，視覚的快適性が求められている．

以上より人は「歩行」以外に様々な行動をとり，それにはたまり空間（ポケットパーク等）が非常に有効である．また立地場所により利用形態，評価構造にかなりの異なり周辺地域の特性を考慮した空間を構成すべきであると思われる．

【参考文献】

1）熊野稔：ポケットパーク手法とデザイン　都市文化社　1991
2）歩行空間ガイドライン研究会：歩行空間ガイドライン　1999